

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2009年11月26日放送

第108回日本皮膚科学会総会⑨ 教育講演12より

「皮膚科領域における漢方治療」

兵庫医科大学 皮膚科 准教授
夏秋 優

皮膚科領域では、アトピー性皮膚炎や痤瘡、乾癬など、慢性、難治性の皮膚疾患を中心に漢方薬を処方している医師はかなり多いと思います。しかし実際には東洋医学の理論が判りにくいこともあって、漢方薬をあまりうまく使いこなせていないのが実情ではないかと思われます。

漢方治療が分かりにくい理由にはいくつかあります。まず、東洋医学は西洋医学とは異なった理論や概念で病人や病態をとらえています。そして、同じ東洋医学であっても、漢方にはいくつかの流派があり、それぞれ、病態の捉え方や考え方が多少異なります。さらには西洋医学的な病名だけでは個々の患者に本当に適切な漢方薬が選択できず、治療効果が上がらないこと、などが挙げられます。

ここでは皮膚科領域における漢方治療について概説します。

まず歴史的な背景を含めて、日本漢方と中医学について説明します。

そもそも、東洋医学は黄帝内経、傷寒論、金匱要略、神農本草経などの中国の古典をもとにして成立しています。そして、主に黄帝内経の記述をもとに現代の中国で教育、実践されている伝統医学は「中医学」と呼ばれています。

一方、これらの書物が日本に伝来した後に独自の発展を遂げ、現在の日本で応用されている考え方は「日本漢方」と呼ばれています。日本漢方の中には、黄帝内経の理論を重視して中医学に近い考え方をとる後世方派、傷寒論や金匱要略の記述を重視して江戸時代に独自の発展をした古方派、両者を合わせて用いる折衷派などが存在します。日本漢方の古方派は日本における漢方医学の中心的存在として知られています。

その考え方の特徴は、患者の体力の充実度を「虚証、実証、中間証」に分類し、さら

に疾患特有の症状、症候のパターンを「証」と呼んで、これを重視して処方を決めることです。また、診察の際には腹部の診察（これを腹診と称する）の所見を重視するのも特徴です。この考え方では、個々の疾患の病因や病態にこだわらず、「証」が決まれば処方として漢方薬が決まるとされています。

日本漢方の古方は経験に基づいた実践的な処方術であり、それなりの利点がありますが、論理的とは言えない点が問題となります。一方、中医学は五臓六腑や気血津液などの病態理論で個々の患者の病態を分析して、これを「証」とし、その病態を改善するために適した薬効（薬能）を有する生薬を選択して組み合わせるやり方です。この診断・治療のプロセスは西洋医学の考え方に近いため、処方決定の理論構成が理解しやすい、という利点があります。

しかし残念ながら中医学の病態理論は科学的に証明されたものではなく、哲学的で難解である、という短所があり、中医学、日本漢方ともにそれぞれ一長一短があります。私は中医学の考え方を基本とした上で、日本漢方の考え方も一部に組み込んで、漢方を理解しやすいように解釈していますので、ここではそれに従って解説させていただきます。

次に「証」の概念と皮膚疾患における「証」の考え方について述べます。

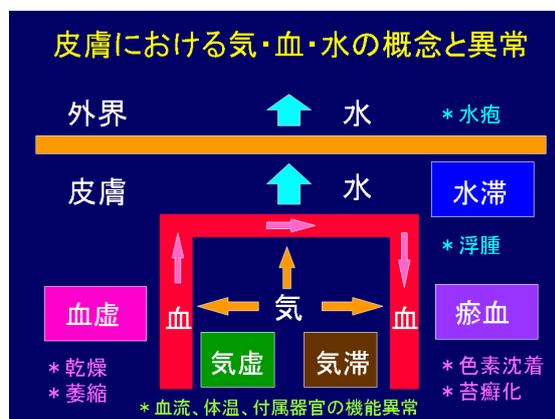
寺澤先生は「証とは患者が現時点で現している症状を気血水、陰陽・虚実・寒熱・表裏、五臓、六病位などの基本概念を通して認識し、さらに病態の特異性を示す症候をとらえた結果を総合して得られる診断であり、治療の指示である。」と述べています。

この中で、五臓とは肝・心・脾・肺・腎を表しますが、西洋医学での臓器名ではなく、機能単位としての概念である点に注意する必要があります。

また、六病位は主に急性熱性感染症における病期つまりステージ分類と考えられます。皮膚疾患の漢方治療を考える場合、気・血・水と寒・熱の考え方が特に重要となるので、次に要点のみを解説します。

気とは生命活動を営むエネルギーであり、主に神経系の働きによる生体の諸機能の調節力と考えることができます。血は生体を物質的に支える赤色の液体で、血液とほぼ同じものです。水（中医学では津液）は生体を物質的に支える無色の液体で、組織間液やリンパ液に相当すると考えられます。

これらの要素の不足、あるいは停滞によって生体に異常を生じます。気の不足を気虚、気の停滞を気滞と表現します。気滞はさらに気鬱（気の循環が停滞した状態）と気逆（気の循環失調による逆流）に分けられます。また、血の不足を血虚、血の停滞



を瘀血、そして水の停滞を水毒、あるいは水滯と呼びますが、中医学では水滯を痰飲と表現します。

これら気血水の異常によって見られる皮膚症状としては、まず気の異常によって血流や体温調節の異常、そして皮膚付属器官の機能異常が表れると考えられます。血虚になると皮膚の乾燥や萎縮、瘀血を生じると皮膚の色素沈着や苔癬化を生じます。水毒（水滯）では浮腫や水疱、あるいは浸出液を生じると考えられます。

気血水の異常に対する治療としては、まず気虚には補気剤、気滯には理気剤、血虚には補血剤、瘀血には駆瘀血剤、そして水毒には利水剤を用います。

次に寒・熱について説明します。

全身、あるいは局所に寒気を自覚し、寒冷環境下で症状が悪化しやすく、温めると軽快する体質や状態を寒証と呼び、治療としては温める薬である祛寒剤を用います。一方、顔面が紅潮し、口渇して冷水を好む場合、あるいは局所の充血、熱感、拍動性疼痛などの症状は熱証と呼びます。皮膚の炎症は基本的には熱証であると考えられ、熱証の治療には熱をさます薬として清熱剤を用います。

次に東洋医学における診察法について述べます。

東洋医学では視覚による患者からの情報収集である視診、聴覚と嗅覚による患者からの情報収集である聞診、病歴や自覚症状の確認による情報収集である問診、医師の手で患者に触れることによる情報収集である切診など、独特の診察法によって証を決定し、その証に従って治療を行うことを原則としており、これを「随証治療」と呼びます。

切診には触診、脈診、腹診があり、それぞれ西洋医学とは異なった観点で診察して情報を集めます。脈診や腹診の所見は漢方処方決定の重要な根拠になることが多いのですが、これらは血液検査や画像検査などによる情報が得られなかった時代の情報収集手段と考えられ、現代医療での位置付けは難しいと思われれます。

次に皮膚疾患に対する漢方治療の考え方を述べます。

西洋医学的な病名に対して漢方薬を選択する方法を病名治療と言います。たとえば、アトピー性皮膚炎に白虎加人参湯、痤瘡に十味敗毒湯、イボにヨクイニン、といった処方の仕方が病名治療です。

一方、個々の症例に対して漢方医学的な証を決めた上で適切な漢方薬を選択する方法を随証治療と言います。

病名治療でも一定の効果が期待できる

漢方治療が適用される主な皮膚疾患と
代表的な漢方薬(病名投与)

皮膚疾患	代表的な漢方薬
アトピー性皮膚炎	白虎加人参湯、補中益気湯
貨幣状湿疹	消風散、越婢加朮湯
蕁麻疹	葛根湯、消風散、十味敗毒湯、茵陳五苓散
皮膚癢痒症	当帰飲子、牛車腎気丸、黄連解毒湯
尋常性痤瘡	十味敗毒湯、荊芥連翹湯、清上防風湯
尋常性乾癬	温清飲、桂枝茯苓丸、通導散
掌蹠膿疱症	黄連解毒湯、温清飲
尋常性疣贅	ヨクイニン
円形脱毛症	柴胡加竜骨牡蛎湯、加味逍遙散
凍瘡	当帰四逆加呉茱萸生姜湯

場合がありますが、漢方薬の有効性をより高めるには随証治療を心がける必要があります。

次に標治と本治という言葉について説明します。

標治とは、現在、目の前に表れている症状、すなわちこれを局所の証と言いますが、これを改善することを目的とした治療で、皮膚疾患においては皮膚の改善が標治です。

たとえば、紅斑に黄連解毒湯、丘疹に十味敗毒湯、皮膚乾燥に当帰飲子、といった使い方です。一方、本治とは現在の病状を引き起こしている患者の体質、すなわち全身の証を改善することを目的とした治療です。

皮膚症状	主な病態	代表的漢方薬
紅斑、熱感	熱	黄連解毒湯、白虎加人参湯
丘疹、膿疱	熱	十味敗毒湯、排膿散及湯
鱗屑、乾燥	血虚	四物湯、当帰飲子
苔癬化、色素沈着	瘀血	桂枝茯苓丸、通導散、桃核承気湯
水疱、湿潤	水毒(水滞)	越婢加朮湯、消風散
浮腫	水毒(水滞)	五苓散、猪苓湯

全身の証は自律神経系や消化吸収系の機能、易感染性や冷えの有無などを評価して判断します。たとえば、胃腸虚弱な小児には小建中湯や黄耆建中湯、化膿しやすい体質には柴胡清肝湯や荊芥連翹湯、疲れやすい気虚体質には補中益気湯、気虚体質に血流の低下や冷えを伴う場合は十全大補湯などが用いられます。

最後に、漢方治療を適用する際の注意事項を述べます。

一般に慢性で難治性の皮膚疾患が漢方治療の対象となることが多いですが、常に西洋医学的な診断、原因検索を心がける必要があります。

また、病状の改善のために標治ばかりにこだわらず、本治を考慮することが重要です。その際、日常生活(食生活や生活リズムなど)の改善を助言することで治療効果を高めることができます。

なお、漢方薬においても種々の副作用、たとえば浮腫、肝機能障害や間質性肺炎などがあり得るため、正しい知識を持って治療に当たる必要があります。

近年、現代医療に則した漢方治療の評価方法が導入されつつあり、漢方薬による治療効果について質の高い優れたエビデンスも得られるようになりました。しかし、個々の症例に対して適切な漢方治療を行うためには、経験に基づいた処方選択のコツがあります。皮膚科領域は漢方治療が有効である疾患が多く、漢方薬によって著効が得られる場合もありますので、実際に漢方薬を処方しながら皮膚疾患に対する治療の幅を広げていただきたいと思います。